

いつまでも主と共に

マタイ 25 : 1 - 13
テサロニケ I 4 : 13 - 18



司祭 ヨハネ 井田 泉

2023年11月12日
聖霊降臨後第24主日

聖アグネス教会にて

先月、韓国を旅行して、大韓聖公会ソウル主教座聖堂（通称、ソウル大聖堂）の主日聖餐式に出席しました。その礼拝で心に残ったことがいくつかありますが、その一つは、福音書朗読の前の場面です。

同じ聖公会の聖餐式なので、流れは同じなのですが、福音書前の聖歌は聖歌隊だけが歌っていました。その歌が続いているうちに、司式司祭とは別の福音書朗読担当の司祭が、聖卓の上に置かれている聖書の前に来て、深く頭を垂れて、そのまま 10 秒くらいもじっと沈黙しています。やがてその司祭が聖書を取り上げて会衆の前に進み出て、「アレルヤ、アレルヤ……」と短い歌を歌いました。これは「福音歓呼頌」というそうです。福音を歓呼して迎える歌、という意味です。そして福音書朗読になります。

この様子を見ていて、大聖堂の礼拝の中で聖書朗読、特に福音書朗読をどんなに大切にしているかを深く感じました。後から聞いたところ、福音書朗読の前に深く頭を垂れてしばらく時を過ごすのは、そこで沈黙の祈りをしているということです。こういう祈りだそうです。

「全能の神よ、わたしの唇と心を清め、あなたの聖なる福音を宣べ伝えるにふさわしい者としてください。」

このような姿勢をわたしも学びたいと思いました。

今日の福音書は、「10人のおとめ」のたとえでした。主イエスが再びおいでになる。「キリストの再臨」について語っています。その最後はこう結ばれていました。

「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」マタイ 25:13

主イエスが再びおいでになる。奇妙な話に聞こえるかもしれませんが。けれどもその奇妙なこと、合理的には納得しがたいことの中に、キリスト教の命があるのです。

主イエスが再びおいでになる。それは、わたしたちの将来には希望がある、ということです。この世界には戦争があり、限りなく苦しみと嘆きがある。一個の人間に限っても、わたしたちは成長して、やがて衰えてその先には死が待っている。それだけを考えれば、わたしたちは悲観して打ちひしがれてしまいます。

しかし主イエスは、わたしたちに会おうとして、やがて必ず来られる。わたしたちとこの世界を清めて、祝福と喜びで満たそうとしておいでになる。

「だから、目を覚ましていなさい。」

賢いおとめたちが本気で花婿を迎えようとして待っていたように、あなたがたも再び来られるイエスを本気で、希望を持って待ちつづけなさい。そのように今日の福音書は呼びかけているのです。

さて今日の使徒書、テサロニケの信徒への手紙Ⅰは、主イエスが再び来られるその場面を、より具体的に生き生きと語っています。

「すなわち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降^{くだ}って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることになります。」4:16-18

「神のラッパ」とか「空中で」といった、少々奇妙に思われるかもしれない表現につまづかないようにしましょう。ここで大切なことは、①「主御自身（イエス御自身）が天から（わたしたちには見えない世界から）（降って）来られる」ということです。②先に召された人たちは復活する。③そしてわたしたち

は主と出会うために、主のもとに引き寄せられる。引き上げられる。

たくさん悲しみを抱えてきたわたしたちが、多くの過ちと傷を持つわたしたちが、わたしたちを愛していてくださる救い主イエスさまと再会する。悲しみと痛みの涙は、喜びと感謝の涙に変えられるのです。

さらにここで語られている一つの言葉に注目しましょう。

「このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることになります。」 4:17

「わたしたちはいつまでも主と共にいる。」

将来の約束です。ありがたい、うれしいことです。

「主と共にいる」。それではわたしたちの過去はどうでしょうか。「主と共にいる」あるいは「主イエスがわたしと共におられる」ということを経験されたことがあるでしょうか。

少しわたし自身のことをお話ししたいと思います。もう 50 年以上も前、大学生時代のことです。わたしは幼児洗礼を受けて、幼い頃から神さまを素朴に信じていたのですが、学園紛争の最中に、その神さまを見失いました。毎週礼拝には出席していま

したが、素朴に神を信じられなくなったわたしは、迷いの中でとても辛い日々を過ごしました。とりわけイエスの復活がわからなくて苦しんだのです。そうした悩みが1年2年と続き、何とか確信を得たいともがきつつ苦しんでいました。

そうしたある日、通学の電車の中で新約聖書・ルカ福音書 24章のエマオの弟子の物語を読んでいました。

イエスが十字架に死なれて3日目の日曜日の午後、二人の弟子たちがエルサレムを出発して、エマオへの道を歩いていました。イエスを失った悲しみに打ちひしがれ、絶望的な思いでいたのです。その後ろから見知らぬ人が追いついて来て道連れになり、二人の苦しい話に耳を傾けてくれた後、聖書の話をしてくれました。夕方になってエマオに着きました。二人はその人を引き留めて、家に招き入れました。夕食のとき、その人は感謝の祈りをしてパンを裂いて配ってくれました。その時、はっと気がついたのです。その人はイエスさまだった。

「彼らは互いに言った、『道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか。』」ルカ 24:32

そこを読んだとき、何かが自分の中で燃えました。その熱い

もの、温かいものが、1日たっても2日たっても、1週間、ひと月たっても消えないで、静かに燃えていました。「復活がわからない」と苦しんでとぼとぼと道を歩いていたとき、すでに復活の主がわたしを追いかけてこられた。主が共におられ、わたしは主と共にいる。理屈ではなく、心の目が開かれたようにして、はっきりと復活の主が生きて共にいてくださることがわかったのです。これが言わばわたしの信仰的原点です。

けれどもそのような経験があるかないかは、最終的に問題ではありません。すでに主イエスは、わたしたちが気づこうと気づくまいと、わたしたちと共におられるのです。ただそれに気づいたとき、目が開かれたとき、喜びと力が与えられます。

わたしたちの、皆さんの人生の歩みとともに、主イエスさまと一緒に歩いてくださる。過去も、現在もわたしたちは主と共にいる。そして将来もそうです。

「このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいる。」

この約束のもとに、この事実のもとに、わたしたちはいるのです。

祈ります。

神さま、主イエスがわたしたちと共にいてくださることを教えてください。そして今日の聖書が語るように、将来、「わたしたちはいつまでも主と共にいることになる」という約束によって、わたしたちを励ましてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン